

愛情をもって生き物と関わる生活科学習

—— 思いをもって生き物と関わり続ける飼育活動を通して ——

名古屋市立榎小学校教諭 原 典 弘

I 研究のねらい

低学年の子どもたちは、自分本位の見方・考え方で動植物と関わっている。年度当初、生活科で野菜苗を植える活動においても、そのような光景をいくつか目にした。子どもたちは、自分で育てると決めた野菜苗を楽しそうに植えていた。その時、ある子どもが水やりをしながら「ミニトマト、大きくなってね」と声をかけた後、「大きくなると、引っっこ抜くぞ」という言葉もかけていた。また、野菜苗を植え終わった数人の子どもたちが、虫をつぶして遊んでいる姿も見かけた。

子どもたちの自然環境や社会環境が変化し、日常生活の中で動植物と関わる機会が乏しくなっている状況であるからこそ、私は生活科において自然や生命と直接関わる活動を大切にしたい。特に、飼育活動では、生き物の世話を続けながら成長を見守ることで、生命と直接関わり続けることができるので、重視したい。

飼育活動について学習指導要領では、「飼育・栽培活動では、繰り返し動植物と関わる息の長い活動を設定することが大切である。継続的な活動をすることによって、親しみの気持ちが生まれ、責任感が育ち、生命の尊さも感じることができる。また、自分本位の見方・考え方から、動植物の立場での見方・考え方ができるようになる」と解説している。私は飼育活動から、生命と関わり続ける充実感をもたせることで、動植物の立場での見方・考え方ができ、愛情をもって生き物と関わる子どもを育てたいと考える。生き物への愛情とは、「しっかり生き物の世話をして大切に大きくしたい」「自然にいる生き物もみんな命をもっているのだから、大切にしたい」「生き物も幸せに生活してほしい」という思いである。

愛情をもって生き物と関わるようになるためには、「生き物と仲良くしたい」「生き物が喜ぶことをしてあげたい」という思いをもちながら関わり続けることが重要であると考え。そのために本研究では、子どもたちが生き物と一対一の関係で、生き物との会話を想像しながら関わり続けられるようにする。また、友達同士の交流を基に、思いや気付いたことの伝え合いを大切にしながら研究を進めていきたい。

II 研究の方法

1 基本的な考え

目指す子どもに迫るために、次の点を指導の重点とし、それが有効であるか授業実践を通して明らかにする。

重点①：生き物への愛情が生まれるように、一人一匹ずつザリガニを飼育する。短期間ではなく、長期間にわたって一対一の関係で飼育活動を続ける。

重点②：「自分はこうしたい」「生き物はこう思うだろうな」という生き物への思いが生まれるように、生き物を擬人化して、会話を想像しながら継続的に関わるようにする。

重点③：自分の思いが深まったり、ザリガニとの関わり方が広がったりするように、友達と思いを伝え合ったり、気付いたことを情報交換したりする。

2 重点について

(1) 重点① 一人一匹ずつザリガニを飼育

生き物への愛情は、「生き物と仲良くしたい」「生き物が喜ぶことをしてあげたい」という思いをもって関わり続けることが重要である。責任をもって世話を続け、思いが生まれやすくするために、飼育活動は対一の関係で行うことが望ましいと考える。また、ザリガニとの出会わせ方を工夫することによって、子どもが思いをもって飼育活動に取り掛かることができるようにする。

中でも、ザリガニは、子どもの学習対象として様々な利点がある。ザリガニの学習対象としての利点を以下に挙げる。

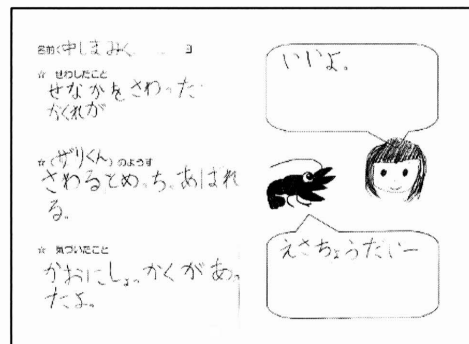
- 適切な方法で飼育をすれば、年間を通して関わり続けることができる。(継続性)
- 飼育環境が工夫しやすく、子どもの思いが生まれやすい。(水・砂・隠れ場所・エサ・温度など)
- 動きや反応が分かりやすい。(生き物と関わり合っていることを実感しやすい)
- 成長の変化を具体的に理解しやすく、気付きが生まれやすい。(脱皮、ハサミの形の変化など)

(2) 重点② 擬人化

子どもがザリガニに思いをもちながら関わり、愛情を感じることができるようにするために、ザリガニを擬人化して、ザリガニの気持ちを考えて世話をしたり、遊んだりすることができるようにする。擬人化することにより、ザリガニの立場で考えたり、ザリガニになりきったりして、思いをもって関わるができると考える。そのために、「なかよし日記」や「なりきり作文」で思いを表現し、記録していく。

○ 「なかよし日記」

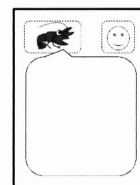
世話の内容やザリガニの様子で気付いたことを記録し、それを基に気持ちを想像して、会話を絵と吹き出しのせりふで表現しながら、ザリガニとの関わりを継続的に記録していく。そうすることで、ザリガニに対する思いが高まったり、ザリガニの立場で気持ちを考えて関わり方を工夫したりするようになる。



【「なかよし日記」の記入例】

○ 「なりきり作文」

ザリガニとの関わりを振り返り、自分がザリガニになりきって、自分にあてて手紙を書く。そうすることで、自分のザリガニに対する世話や関わり方をザリガニの立場で振り返ることができる。また、ザリガニの気持ちになって、ザリガニが喜ぶこと、嫌がることを考えることができる。



【「なりきり作文」の形式】

(3) 重点③ 思いの伝え合い・気付きの情報交換

子どもの思いや気付きが広がり、さらなる活動と思いが生まれるように、子どもの思いや気付きを紹介したり発表会を行ったりして、思いや気付きを伝え合いながら活動できるようにする。そのために、「ザリガニ指人形」で表現活動を行ったり、活動の終盤に話し合いを行ったりする。

○ 「ザリガニ指人形」

世話をしながら想像したザリガニとの会話を、ザリガニの指人形を用いて表現し、学級で伝え合うことで、意欲的に思いを表現することができ、友達の思いにふれながら、さらに思いをもってザリガニと関わるができるようになる。

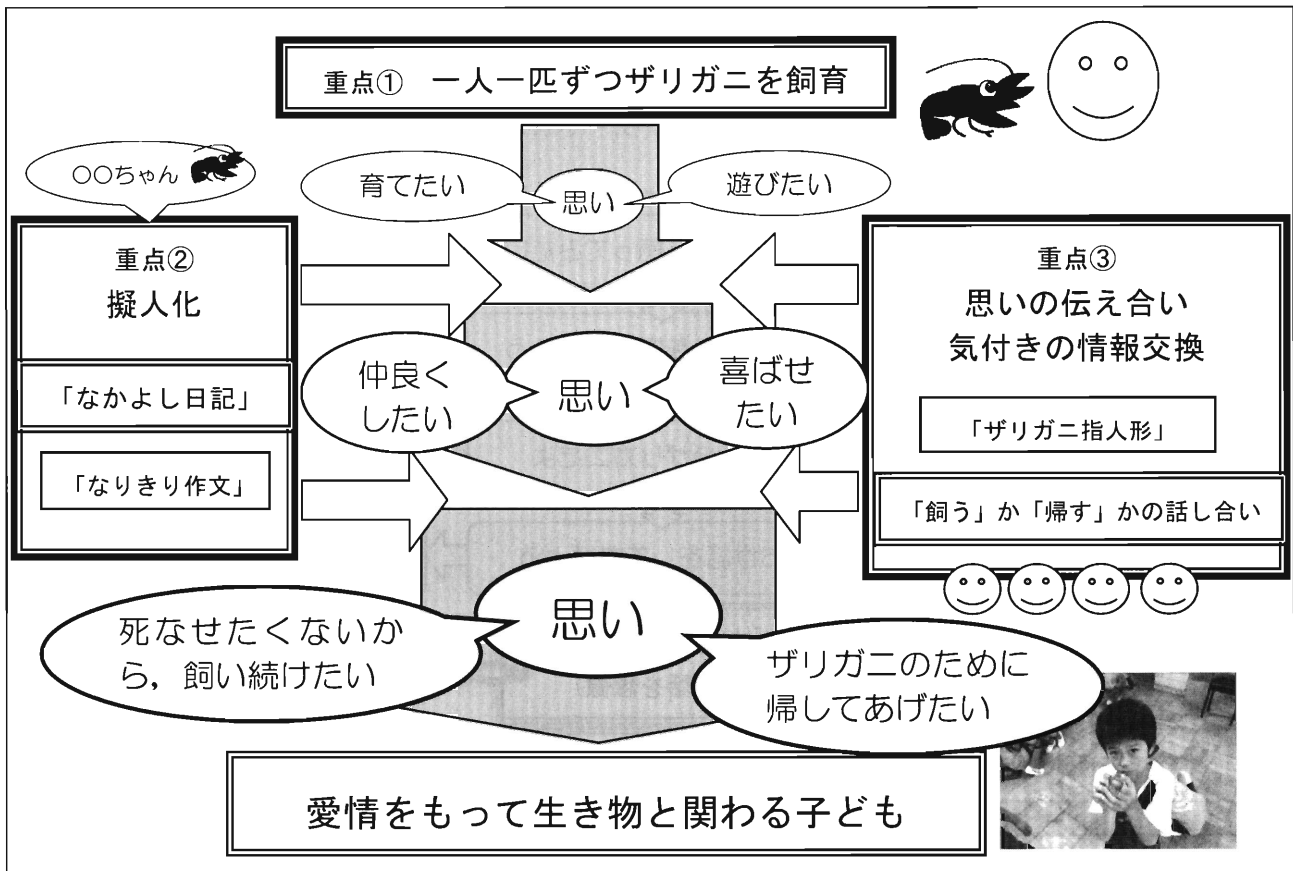


【「ザリガニ指人形」】

○ 「飼う」か「帰す」かの話し合い

活動の終盤に、育ててきた自分のザリガニを、「飼い続ける」か「自然に帰す」かを考える。それぞれの場合についてのメリット・デメリットを考えながら、学級で思いを伝え合うことで、ザリガニにとっての幸せを様々な視点で考えることができるようにする。

3 本研究の基本的な学習の流れ



4 長期研修から

- ・ 「なかよし日記」の形式を複数（エサの種類やザリガニの大きさを記録，想像した会話のかわりに思ったことや感じたことを表現）用意し，子どもが日によって選択できるようにした。
- ・ 擬人化の方法として「なりきり作文」を教わり，活動の振り返りに活用した。

Ⅲ 子どもの実態

- 1 調査の対象 名古屋市立榎小学校 第2学年 32人
- 2 調査の方法 質問紙法（平成23年6月1日 実施）
- 3 調査の結果

【質問：生きものとあそぶことは すきですか】

とてもすき	まあまあすき	あまりすきでない	きらい
19人	8人	2人	3人

（それは どうしてですか） ※「とてもすき」以外の理由

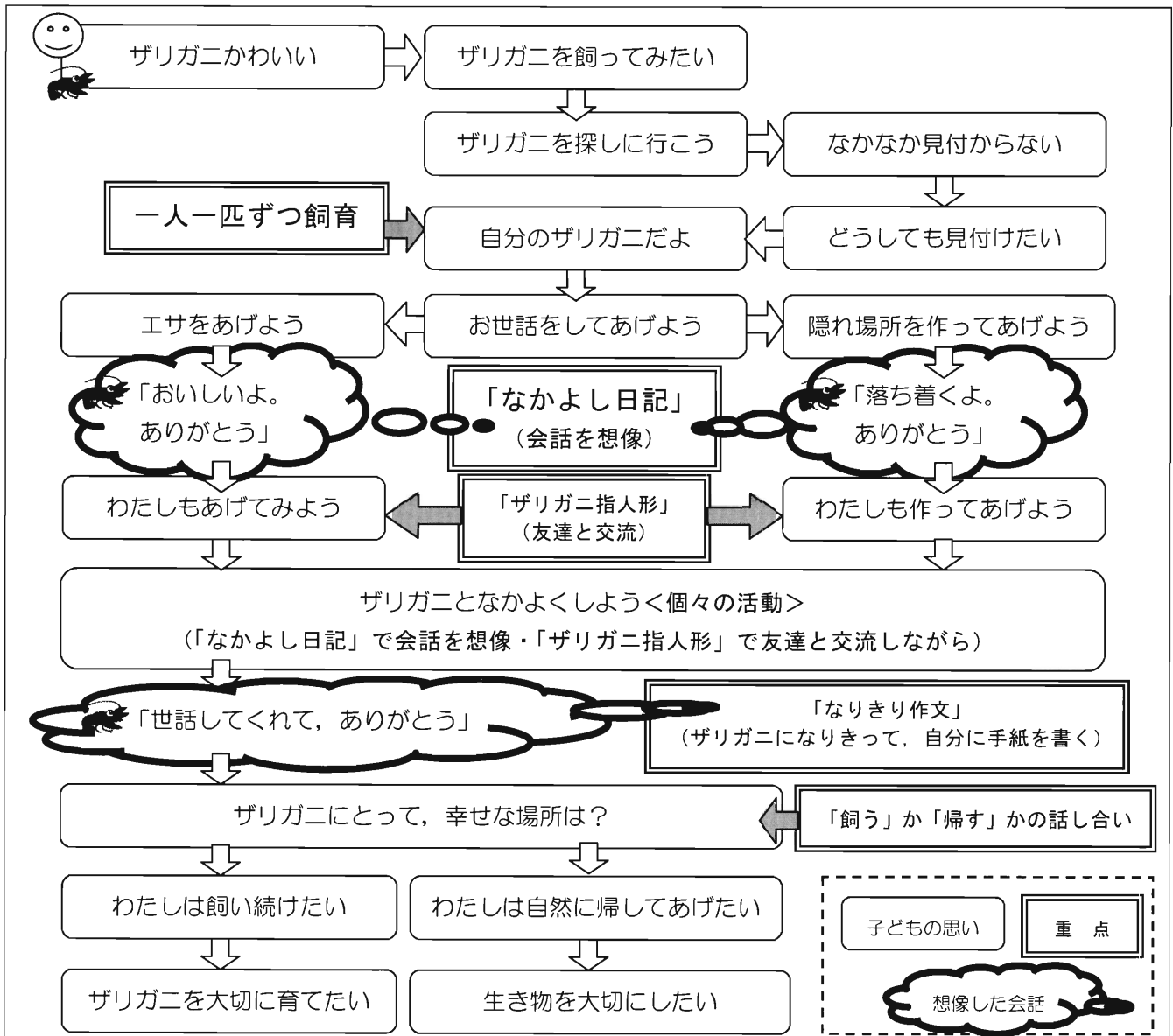
- ・ あまり遊んだことがないから
- ・ 人間と遊んだ方が楽しいから
- ・ 怖いから
- ・ 気持ち悪いから

4 考察

生き物と進んで遊ぼうとしない子どもは，生き物と遊んだ経験が少なく，ふれ合う楽しさを味わったことがない。そこで，思いをもって生き物と関わり続けながら，生き物とふれ合う楽しさを味わえるようにする。また，生き物に恐怖心や嫌悪感をもっている子どももいる。友達と交流しながら楽しく飼育を続け，恐怖心や嫌悪感をなくせるようにする。

IV 授業実践

- 1 単元 「生きもの 大すき」(20 時間完了+常時活動：6～11 月)
- 2 目標 身近な場所にいる生き物を探して飼育し、生き物の育つ場所、成長の様子、生命をもっていることなどに気付き、生き物への親しみをもち、大切にすることができるようにする。
- 3 単元の活動の流れと指導の重点



4 個別に検証する子どもについて

A 児	B 児	C 児
<p>植物に関心をもち、対象への思いをもって学習することができるが、<u>動物にはあまり興味をもっていなかった。</u></p> <p>生き物を育てることは「あまり好きでない」で、その理由は、「上手く世話をできないから」だった。</p> <p>ザリガニを育てた経験はなかった。</p>	<p>友達や下級生など、人には優しく接することができるが、<u>生き物に抵抗感をもっていた。</u></p> <p>生き物と遊ぶことや生き物を育てることは「嫌い」で、その理由は、「虫が気持ち悪いから」だった。</p> <p>ザリガニを育てた経験はなかった。</p>	<p>生き物と遊ぶことや生き物を育てることは「とても好き」で、その理由は、「かわいいから」だった。</p> <p>しかし、栽培活動で、<u>生き物への愛情が感じられない自分本位な言葉をかけていた。</u></p> <p>ザリガニを育てた経験があった。</p>

5 重点①「一人一匹ずつザリガニを飼育」について

(1) 実践の様子

ア ザリガニとの出会いの様子

3年生から「ザリガニは、触って一緒に遊ぶことができるよ」「世話もそんなに難しくないよ」ということを教えてもらった。2年生の子どもたちはザリガニを目にして、「かわいい!」「ほしー!」と声をあげ、自分もザリガニを育てたいと言っていた。



【ザリガニを見せてもらう様子】

	A児	B児	C児
出 会 い	3年生にザリガニの飼い方を紹介してもらい、世話がそれほど難しくないと教わった。 その後、「ザリガニをまあまあ育てたい」という思いを、振り返りシートに記述した。	3年生にザリガニを紹介してもらい、そばに近寄って興味深そうに見つめていた。 その後、「ザリガニがかわいいから、まあまあ育てたい」という思いを、振り返りシートに記述した。	3年生にザリガニと一緒に遊ぶ様子を紹介してもらい、ザリガニを見ながら「かわいい」と声を上げていた。 その後、「早くザリガニをとってきて育てたい」という思いを、振り返りシートに記述した。

イ ザリガニを探しに行く様子

子どもたちは、「自分たちも、3年生と同じように、ザリガニをとってこよう」と、ザリガニがいる場所を探したが、学区にはザリガニがいそうな場所はどこにもなかった。そこで、ザリガニを捕まえられそうな場所をいろいろ探し見付けたのが、名古屋市の隣のあま市にある水田の用水路だった。
作った釣り道具やエサ、虫かご、たもを手に、電車に乗ってザリガニを探しに出掛けた。初めはなかなかザリガニを捕まえることができなかったが、アドバイスをし合いながら捕まえることができた。

	A児	B児	C児
探 し に 行 く	一生懸命ザリガニを捕まえようとしていたが、なかなか捕まえられなかった。友達に手伝ってもらい捕まえた。帰り道は、ザリガニが入った虫かごを大切に抱えて帰った。 その後、「こわいけど、かわいいから、とても育てたい」という思いをアンケートに記述した。	ザリガニをなかなか捕まえられず、「手伝ってほしい」と言うので、教師が手伝い、小さいザリガニを捕まえた。帰り道は、虫かごの中のザリガニを見つめながら持って帰った。 その後、「かわいくて小さくて育てやすいから、とても育てたい」という思いをアンケートに記述した。	「早く自分のザリガニがほしい」と言いながら、ザリガニが捕まえられそうな場所を考えていた。 一生懸命ザリガニを探し、捕まえて友達に見せていた。 その後、「赤くてかわいいから、とても育てたい」という思いをアンケートに記述した。

ウ 一対一の関係でザリガニと関わりながら

全員ザリガニを捕まえることができたので、一人一匹ずつザリガニを育て始めた。エサは、ニボシやスルメをあげたり、自分があげたいものを用意したりしていた。また、隠れ場所を作ったり、石や砂を敷いたりしていた。
子どもたちは、ザリガニとの会話を想像したり、友達と交流したりしながら、世話を続けることができた。世話が終わった後は、ザリガニを虫かごの外に出したり、手の上に乗せたりして、一緒に遊んでいた。

	A児	B児	C児
一 対 一 の 関 係	初めはザリガニに触ることができず、恐る恐る世話をしていた。しかし、エサやりや水換えなど、責任をもって世話を続けた。 1か月ほどでザリガニをつかめるようになり、とても喜んでいて、ザリガニを腕に乗せて「かわいい」と優しく声をかけていた。	ザリガニに触ることができなかったので、恐る恐る世話をしていた。しかし、ザリガニの様子を詳しく観察しながら、エサやりや水換えなどの世話を続けた。 いつもザリガニの様子を見に行き、ザリガニがエサを食べたり、脱皮したりするのを見て、喜んでいて。	「はさまれてもいたくない」と言いながら、ザリガニの世話をし、ふれ合って遊んでいた。1か月以上一対一の関係で関わり、「死なないでね」という思いをもち、「なかよし日記」に表現していた。 いつもザリガニの様子を見に行くようになった。

(2) 考察

	A児	B児	C児
出 会 い ・ 探 し に 行 く ・ 一 対 一 の 関 係	<p>「生き物を育てることはあまり好きではない」という思いが「ザリガニをまあまあ育てたい」という思いに高まったのは、世話がそれほど難しくないうことを教わったことで、「自分にも育てられそう」という思いをもつことができたからであると考え。</p> <p>さらに、「ザリガニをとて育てたい」という思いが高まったのは、「苦勞して手に入れた自分のザリガニ」という気持ちをもてたからであると考え。それは、虫かごを大切に抱えて帰る様子からもうかがえる。</p> <p>ザリガニを腕に乗せ、優しく声をかけることができたのは、「自分だけのザリガニ」という思いで責任をもって世話を続けることで、「かわいい」という思いが高まり、ふれ合いを楽しむことができたからであると考え。</p>	<p>「生き物を育てることは嫌い」という思いが「ザリガニをまあまあ育てたい」という思いに高まったのは、小さなザリガニを実際に見たことで、「かわいい」という思いをもつことができたからであると考え。</p> <p>さらに、「ザリガニをとて育てたい」という思いが高まったのは、「小さくてかわいい自分のザリガニ」という気持ちをもてたからであると考え。それは、ザリガニを見つめながら持ち帰る様子からもうかがえる。</p> <p>世話をしながらザリガニの様子を見て、エサを食べたり、脱皮したりすることを喜ぶことができたのは、「自分の小さなザリガニが、大きくなってほしい」という思いで世話を続けることで、ザリガニの成長を感じることができたからであると考え。</p>	<p>「早くザリガニをとってきて育てたい」という思いをもったのは、3年生がザリガニと一緒に遊ぶ様子を見たことで、「一緒に遊びたい」という思いをもつことができたからであると考え。</p> <p>さらに、「ザリガニをとて育てたい」という思いが高まったのは、ザリガニが捕まえられそうな場所を一生懸命考え、捕まえたことで、「やっと捕まえた自分のザリガニ」という気持ちをもてたからであると考え。</p> <p>常にザリガニの様子を気にかけることができたのは、「死なせたくない」という思いで関わることで、「自分のザリガニが元気でいられるようにしてあげたい」という思いをもちながら世話をすることができたからであると考え。</p>

生き物に抵抗感があつた子も、「ザリガニを育てたい」という思いをもつことができたのは、世話の方法を教わったり、小さなザリガニと一緒に遊ぶ様子を見せてもらったりしたことで、「自分にも育てられそう」「小さくてかわいい」「一緒に遊びたい」という思いをもつことができたからであると考え。

そして、「ザリガニを育てたい」という思いが高まったのは、苦勞してザリガニを探し、一人一匹ずつ手に入れたことで、「苦勞して手に入れた自分だけのザリガニ」という思いをもつことができたからであると考え。

子どもたちが責任をもってザリガニの世話をしたり、ふれ合いを楽しんだりすることができたのは、「かわいい」「大きくなってほしい」「元気でいてほしい」などの思いをもって、ザリガニと一対一の関係で関わり続けたからであると考え。

6 重点②「擬人化」について

(1) 実践の様子

ア 「なかよし日記」をまとめる様子

「なかよし日記」に、ザリガニの世話の記録として、世話をしたこと、ザリガニの様子、気付いたことなどをまとめていった。そして、それを基にザリガニの気持ちを想像して、会話を絵と吹き出しのせりふで表現した。初めは一言ずつのせりふが多かったが、段々とキャッチボールのように会話を表現する記述が増えていった。

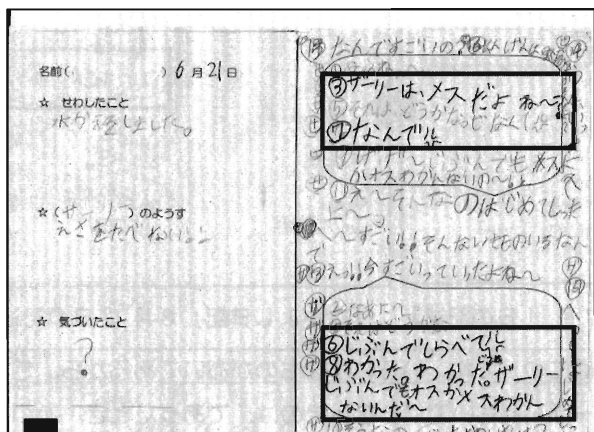
「なかよし日記」は、飼育活動を通して継続的に記述し、つづっていき、最終的には40ページ以上の本になった。

イ 「なりきり作文」を書く様子

子どもたちは、ザリガニになりきって自分あてに手紙を書いた。今まで世話をし続けたことへの感謝や、今後どのように世話をしてほしいかという期待などを書いてきた。また、これからも仲良くしていきたいという思いや、出会った時の思いを表現する子どももいた。

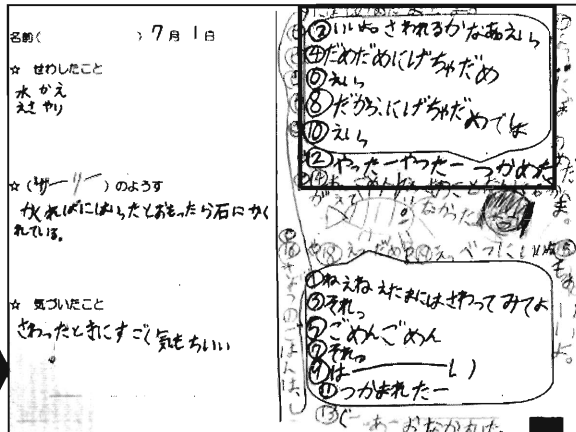
数日後、「ザリガニから手紙がきたよ」と言っ、「なりきり作文」を書いた本人に渡した。そして、今度はザリガニにあてて返事を書いた。

A児



【「なかよし日記」6月21日の記述】

自分のザリガニがオスカメスカを確かめた。



【「なかよし日記」7月1日の記述】

ザリガニに触れながら声をかけるようになった。

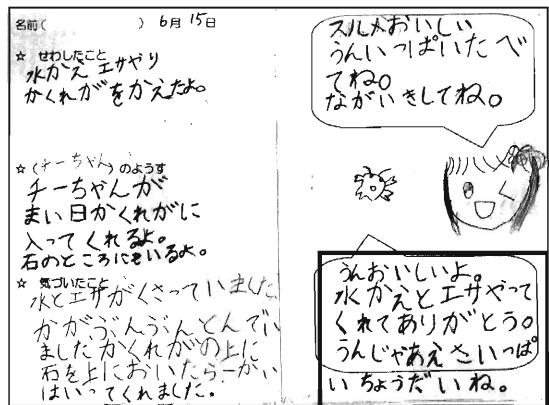
「いっぱい水かえをしてくれて、ありがとう。たまに水がきたないからきをつけてね。夏の間にしないようにしてくれて、ありがとう。さいしょつかまえられたときは、こわかったけど、いろいろとおせわしてくれたときは、きになったよ。でも今もときどきこわくなることは、あるんだ。今日もお世話してね。今は、ちょっとしあわせだよ。」

【「なりきり作文」の記述】

「水がきたなくないように、今日からがんばるね。できるだけサニーが喜ぶようにするね。あたりまえだよ。だって前に言ったように、サニーをしなせたくないんだもん。はじめてあった人はこわいけど、ずっといっしょにいれば、どんどんなれていくもんね。こわいときは、わたしだってあるよ。わたしはたぶんずっとしあわせだよ。」

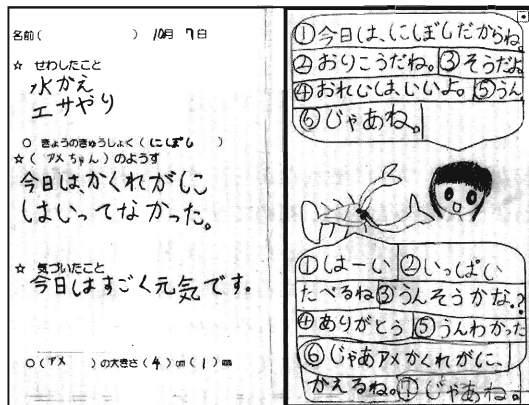
【「なりきり作文」への返事】

B児



【「なかよし日記」6月15日の記述】

エサがなくなる様子を見て、新しいエサをあげていた。



【「なかよし日記」10月7日の記述】

話しかけながら、楽しそうに関わっていた。




「いつもエサやりや水かえをしてくれて、ありがとう。かくれがをかえてくれて、ありがとう。エサおいしいよ。(B児) ちゃんのこと大すきだよ。なつ休みのとき水かえしてくれて、ありがとう。あのときは、あつかったよ。ありがとう。」

【「なりきり作文」の記述】

「おてがみありがとう。すごくうれしかったよ。わたしもだいすきだよ。ほかにしてほしいことがあったら、なんでもいって。エサも明日から、かえるね。これからもよろしくね。おたがいがんばろうね。」

【「なりきり作文」への返事】

C児

<p>名前() 六月十日</p> <p>☆ 世話したこと いさを触った えさをあげた</p> <p>☆ (「ハ、ア」)のようす げんき</p> <p>☆ 気づいたこと ちんぼかいたらほんま いたくない!</p> <p>大さくなってね。</p>  <p>わかったよ。</p>	<p>名前() 七月 11日</p> <p>☆ 世話したこと 水かえ</p> <p>☆ (「ハ、ア」)のようす 元気 はるんだ</p> <p>☆ 気づいたこと 水かえがなめてくほ</p> <p>元気が しなだしてね。</p>  <p>元気が たって</p>	<p>名前() 8月12日</p> <p>☆ 世話したこと 水かえ</p> <p>☆ (「ハ、ア」)のようす 元気 はやくなつた</p> <p>☆ 気づいたこと はやくなつた</p> <p>がんばって 大き くた</p> <p>おかあさんいないの?</p>  <p>元気が たつたよ</p>
--	---	---

【「なかよし日記」6月10日の記述】 【「なかよし日記」7月11日の記述】 【「なかよし日記」8月12日の記述】

「いつもそだててくれて、ありがとう。でも、えさはおおめにやってね。いろいろなものがおいてあるから、きれいにしておいてね。水をはやくいれてね。いろいろあったけど、一ばんおもいでにのこったのは、であったとき。あのとときであった田んぼには、いろいろなザリガニがいたね。」

【C児の「なりきり作文」の記述】

「水かえのときに、水のところにげないでよ。かくれがにいつもはいたり、あそんだりしてね。エサはおおめにやるからね。水をはやくいれるから、ゆるしてね。あとは、たまにはさみむけないでね。」

【C児の「なりきり作文」への返事】

いつもザリガニの様子とエサや水の様子を見に行くようになった。

(2) 考察

	A児	B児	C児
なかよし日記・なりきり作文	<p>ザリガニがオスカメスカを触って確かめることができたのは、ザリガニとの会話を想像しながら、「自分のザリガニがオスカメスカ知りたい」という思いが高まり、「オスカメスカ調べるために、足をよく見よう」という思いをもつことができたからであると考えてる。</p> <p>また、ザリガニに触れながら声をかけるようになったのは、初めてザリガニをつかんだ時の思いを会話で表現することで、関わりが深まる喜びを感じることができたからであると考えてる。それは、「なりきり作文」の返事の「はじめてあった人はこわいけど、ずっといっしょにいれば、どんだんなれていくもんね。こわいときは、わたしだってあるよ。わたしはたぶんずっとしあわせだよ」という記述からもうかがえる。</p>	<p>ザリガニの食べる量や水の汚れを気にしながらエサやりを行うことができたのは、会話を想像しながら、ザリガニの立場で世話の仕方を考えていたからであると考えてる。それは、ザリガニの「うん、おいしいよ」「水かえとエサやってくれて、ありがとう」「エサいっぱいちょうだいね」というせりふからもうかがえる。</p> <p>また、ザリガニに話しかけながら、楽しそうに関わるることができたのは、会話を想像して表現することで、友達のような気持ちで関わるることができたからであると考えてる。それは、「なかよし日記」の記述や「なりきり作文」の返事の「わたしもだいすきだよ。ほかにしてほしいことがあったら、なんでもいって。これからもよろしくね。おたがいがんばろうね」という記述からもうかがえる。</p>	<p>いつもザリガニの様子を気にするようになったのは、ザリガニとの会話を想像しながら関わり、ザリガニが命をもっていることを感じたり、家族がいたことを想像したりすることができたからであると考えてる。それは、「なかよし日記」の「死なないでね」「おかあさんいないの?」「ごめん」というせりふからもうかがえる。</p> <p>また、いつもエサや水などの飼育環境の様子を気にするようになったのは、「なりきり作文」によって、ザリガニの立場で世話を振り返り、今後どんなことに気を付けて関わっていくとよいかを考えることができたからであると考えてる。それは、「えさはおおめにやってね。いろいろなものがおいてあるから、きれいにしておいてね。水をはやくいれてね。」という記述からうかがえる。</p>

ザリガニへの思いを高めたり、ザリガニとの関わり方を考えたりすることができたのは、生き物を擬人化し気持ちを想像して、会話を絵と吹き出しのせりふで表現したからであると考えてる。

また、自分の世話をザリガニの立場で振り返ったり、今後どんなことに気を付けて関わっていくとよいかを考えたりすることができたのは、「なりきり作文」でザリガニになりきって自分に手紙を書いたからであると考えてる。

7 重点③「思いの伝え合い・気付きの情報交換」について

(1) 実践の様子

ア 想像したザリガニとの会話を「ザリガニ指人形」で表現する様子

「なかよし日記」で想像したザリガニとの会話を、「ザリガニ指人形」を使ってみんなの前で発表し合った。

児「エサおいしい？」 ⇨ ザ「うん、おいしいよ」

児「隠れ家、気に入った？」 ⇨ ザ「うん、気に入ったよ」
 というように、エサやりをしたことや、隠れ場所を作ったことで、ザリガニが喜んでいると想像したり、ザリガニが望むことを想像したりして、考えた会話を発表することができた。



【想像した会話を発表する様子】

また、友達の発表を聞き、自分の活動に取り入れる様子も見られた。

	A児	B児	C児
ザリガニ指人形	<p>初めは「ザリガニ指人形」で発表することはなかったが、ザリガニを初めてつかめた時の喜びを会話にして、発表することができた。</p> <p>その後、ザリガニに実際に声をかけながらふれ合う様子が見られた。そして、「ザリガニ指人形」で発表する機会が増えていった。</p>	<p>「なかよし日記」には、想像したザリガニとの会話を記述していたが、「ザリガニ指人形」で発表することはほとんどなかった。</p> <p>発表する場を設けても、あまり感情を込めて表現する様子が見られなかった。</p> <p>A児の発表後、自分のザリガニをつかもうと挑戦し、恐る恐るではあるが、つかむことができた。</p>	<p>初めは「なかよし日記」の記述が少なく、「ザリガニ指人形」で感情を込めて表現する様子が見られなかった。友達の発表はよく見て聞き、発表が終わると拍手をしていた。</p> <p>徐々に「なかよし日記」の記述が増え、「死なないでね」「ごめんね」などのせりふを、感情を込めて表現する様子が見られた。</p>

イ ザリガニの今後について話し合い、考える様子

自分が飼っているザリガニを、そのまま飼いつづけた方がよいのか、自然に帰した方がよいのかを話し合った。「飼いつづける」場合と「元いたところに帰す」場合のよい点と問題点について話し合った。それとともに、「自分の思い」と「ザリガニの立場での意見」の両方の視点でザリガニの今後について考えた。子どもたちは、「虫かごだと、部屋が狭くて、かわいそうだよ」「自然に帰すと、エサがとれないかもしれないから、心配だよ」など、自分の思いやザリガニの立場での意見を次々に発表していった。

話し合いを基に、一人一人が自分のザリガニをどうするか考えて、「なかよし日記」の会話の形式やザリガニにあてた手紙の形式で思いを表現した。飼いつづけたいと思う子も自然に帰したいと思う子も、「自分がしっかり世話をして、飼いつづけたい」「絶対に離れたくないから、飼いつづけたい」「狭いところはかわいそうだから、帰してあげたい」などと、ザリガニに対する思いを表現することができた。

	A児	B児	C児
話し合い	<p>話し合い前は、「かわいい」「成長したところを見たい」「たまごを産むところを見たい」から「飼いつづけたい」という思いを記述した。</p> <p>話し合い当日は、欠席だった。(次時で、両方の場合のよい点と問題点について話し合ってまとめたことを教わった。)</p> <p>話し合い後は、「食べられるかもしれない」から「飼いつづけたい」という思いを記述した。</p>	<p>話し合い前は、「なかよしになった」から「飼いつづけたい」という思いを記述した。</p> <p>話し合い当日は、友達の意見を真剣に聞き、どうしたらよいか考えている様子だった。「ザリガニは本当はお母さんがいい」から「自然に帰したい」という思いを発表した。</p> <p>話し合い後は、「部屋が狭い」「お母さんに会いたいだろう」から「自然に帰してあげたい」という思いを記述した。</p>	<p>話し合い前は、「大きいザリガニに食べられる」から「飼いつづけたい」という思いを記述した。</p> <p>話し合い当日は、「逃すと仲間に食べられる」から「飼いつづけたい」という思いを発表した。友達の意見を真剣に聞き、どうしたらよいか考えている様子だった。</p> <p>話し合い後は、「エサがなくて死んでしまうかもしれない」「食べられるかもしれない」から「飼いつづけたい」という思いを記述した。</p>

(2) 考察

	A児	B児	C児
ザリガニ指人形・話し合い	<p>ザリガニに実際に声をかけながらふれ合う様子が見られるようになったのは、ザリガニを初めてつかめた時の喜びを会話にして友達に表現することで、「ザリガニと仲良くすると楽しい」という思いをもつことができたからであると考え。</p> <p>「飼い続けたい」という思いをより強くもつようになったのは、「飼う」場合と「帰す」場合のよい点と問題点を教わり、「食べられるかもしれない」という自然環境について目を向け、「大切なザリガニを、危ないところに行かせたくない」という思いをもつようになったからであると考え。</p>	<p>思いをあまり表現できなかったのは、声や身振りでの表現技能が未発達だったからであると考え。</p> <p>自分のザリガニをつかもうと挑戦することができたのは、A児がうれしそうに発表するのを見たからであると考え。</p> <p>「なりきり作文」への返事のように、「飼い続けたい」という強い思いをもっていた。それが「自然に帰してあげたい」という思いに変わったのは、「部屋が狭い」「お母さんに会いたい」というザリガニの飼育環境や家族という視点で考えることができたからであると考え。</p>	<p>「死なないでね」「ごめんね」などのせりふを、感情を込めて表現することができるようになったのは、友達の発表を参考にして、ザリガニとの会話を想像できるようになり、自分の思いをもつことができるようになったからであると考え。</p> <p>「飼い続けたい」という思いをより強くもつようになったのは、「エサがなくて死んでしまうかもしれない」という新たな視点でザリガニの危険について考え、「死なせたくないから、自分にできることはしてあげたい」という思いをもつようになったからであると考え。</p>

ザリガニに対して思いをもって関わったり、実際に声をかけながらふれ合ったりすることができたのは、「ザリガニ指人形」を使って表現活動を行うことで、ザリガニと関わる様子や関わりから生まれた思いを伝え合うことができたからであると考え。それは、A児の発表がB児の活動につながった様子からもうかがえる。

自分のザリガニの今後について強い思いをもつことができたのは、そのまま飼い続けるか自然に帰すかを学級で話し合い、それぞれの場合についてのメリット・デメリットを考えながら自分の思いを伝え合うことで、様々な視点でザリガニの今後を考えることができたからであると考え。それは、B児やC児が、他の友達の思いを参考にして自分の思いを深めていく様子からもうかがえる。

V 研究のまとめ

実践後にも、実践前と同様に【生きものと あそぶことは すきですか】というアンケートを行った。

<結果>	とてもすき	まあまあすき	あまりすきでない	きらい
左：事前 右：事後	19→25人	8→6人	2→1人	3→0人

子どもたちは、生き物への抵抗感や嫌悪感をなくし、楽しく関わるできるようになってきた。「あまりすきでない」という子の理由は「ザリガニを触れないから」だったが、ザリガニを育てることは「とてもすき」と答えた。

A児は、ずっと育ててきたザリガニが12月に死んでしまい、声を上げて大泣きしていた。泣きながらお墓を作り、お別れをした。その後も、お墓に行ってお参りする姿が見られた。B児は、ザリガニを自然に帰したいと思ったが、まだ外は寒いので今帰すのはかわいそうだと思い、温くなるまでは育てることにした。C児は、毎日放課になるとザリガニの様子を見に行き、「今日も元気だったよ」と嬉しそうに話し掛けてくる。このように、子どもたちは生き物への愛情をもった姿を多く見せてくれる。

ザリガニと一対一の関係で、会話をしながら思いをもってザリガニと関わり続けることで、ザリガニへの愛情が生まれていったと考える。

今後も、ザリガニだけでなく様々な生き物を育てたり、ふれ合ったりすることで、生き物への愛情をさらに深めることができるように研究を進めていきたい。

参考・引用文献等 下平伸子「平成22年度横浜市立大岡小学校公開授業研究会資料」(2011)